

---

# 絵画展にて

天崎剣

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

絵画展にて

### 【Nコード】

N2236C

### 【作者名】

天崎剣

### 【あらすじ】

職場の先輩「遠田<sup>えんた</sup>さん」の描いた絵を見るために、私は小さな絵画展へと足を踏み入れた。そこで出会ったのは、心を打つ、絵だった。自分の未熟さを噛み締める、私。心の成長を描く。

とある地方都市の、空き店舗だらけの商業ビルの三階。私は職場の先輩、遠田<sup>えんた</sup>さんの紹介で、そこで開催される小さな絵画展へと足を向けた。高校のときに美術部だった私は、先輩の絵が拝見できると知り、わくわくしていた。

遠田さんは、五十代後半。課は違うが、温厚で、人当たりのよい人だ。四角い顔に、黒縁の眼鏡をかけ、もさもさした整わない白髪交じりの髪の毛が、あちこちに無造作に広がっている。芸術家というよりは、普通のおじさんである。

職場の人は口々に、「遠田さんの絵はプロだ。彼の母校にも三百号の油絵が飾ってある。数々の美術展に出品し、賞を貰っている」と言う。とにかく、素晴らしらしいのだ。職場では、冴えないただの職員の一人に過ぎない彼が描く絵とは、いったいどんなだろうか。就職を理由に筆を置いてしまった私だが、そればかりが頭の中を駆け巡った。

バブルの頃に建てられたらしいそのビルは、殆ど廃墟状態だった。見た目もそうだが、中に入ってみると、更に酷い。一、二階の部分にテナント、三階部分が市民ギャラリーとなっている。テナントといっても、数えるほどしかなく、ただっ広い空間や、ビニルシートで囲われた部分が相当目立つ。若い女が一人で来るには少し勇気がいる。どちらかと言うと、用事がなければ来たくない所と言っても、過言ではない。

エスカレーターを上がり、三階へ。市民ギャラリーの受付が目の前にある。

私は、そこで自分が更に場違いなのに気付く。

二十代の女性は私だけ。あとは揃って、四、五十代のおじさんおばさんばかりだったのだ。

受付で名前を書き、遠田さんを探す。知らないところで絵を見る

のは初めてで、誰かにいて欲しかった。ギャラリーの奥で別のお客さんと話していた遠田さんが、私の存在に気付き、近づいて来た。「いらっしやい」

仕事場で聞く、そのままの声で私を迎えてくれたことに、ほっとする。

たくさんさんの絵が飾られ、どこから見たらよいのか、全くわからな  
い。困った私を見かねて、遠田さんは、一つずつ、解説してくれた。  
どういう人が描いた絵で、どういうところがよいのか。わかりやす  
く、丁寧に。

水彩画、油絵。小さな空間に、美しい色たちが私を誘う。

仕事を始めてから、めっきり「絵」というものに疎くなってしまう  
っていた。今日は久しぶりに、心が癒される。

「どんな絵が好きなの？」

遠田さんに聞かれ、私は即座に、

「風景画がいいです。あの人の絵は、細かく描写されていていいで  
すね。色も鮮やかだし。あと、この女性の、幻想的な絵も好きです。  
透き通っていて、癒されます」

と答えた。なるほどと頷き、少し黙る遠田さん。私は何か、余計な  
ことを言ってしまったんだろうか。

「私のはね、こういう絵なんだよ」

彼は私の目を見ると、にっこり笑って奥の絵を指差した。その先  
に、大きな木の絵が二枚ある。

私は、一目見ただけで圧倒されてしまった。

(う、うまい……)

正直、それ以外の感想が浮かばないくらい。

襖大の絵。巨木の根っこが、カンバスいっぱい描かれている。  
力強く、荘厳で、迷いのない色使い。

題材があまりに強烈で、私は足が竦んだ。

秋色に彩られたその巨木の正体は、川岸に落ちていた枯れ木なの  
だ、と彼は言った。

「私は、キレイな景色を描くほどの技術を持っていないからね。こ  
ういう、その辺に転がっている、素朴なものの方が、案外味が出る  
だろ？」

「はい……。そうですね。びっくりしました。こういう描き方もあ  
るんですね」

「大きな木が転がっていたらね、私は喜んで車に積んで、家に持ち  
帰るんだ。そして、それを覗き込みながら、ああでもない、こうで  
もないと、仕事が終わってから懸命に絵筆を取って、納得するまで  
色を塗りたくるんだ。そうすると、ただの木が、違う生き物に見え  
てくる。自然が作り出した、美しさと言うものが、私にははつきり  
と感じ取られるんだ」

遠田さんの、絵を語る時の目は、きらきらと輝いていた。

仕事をしているときの遠田さんとは、全然違う人に見える。なん  
て、ステキなおじさんなんだろう。私は、職場の先輩としてはな  
く、人間としての遠田さんに、今まで以上の親近感を覚え始めてい  
た。

「私が絵を描き始めたのは、実は、大分遅くてね。三十の頃にね、  
入院したことがきっかけだったんだよ」

「え……。そんなに、遅いんですか？」

自分の絵を一生懸命に見る私を気に入ったのか、彼は自分のこと  
を語り始めた。

「そう、学生の頃なんて、絵筆を握ったことはなかった。事故を起  
こして足を骨折してしまつてね、暫く入院していたことがあつたん  
だよ。……。その時にね、あんまり暇だったもんだから、絵を描き始  
めた。そしたら、コレが案外、おもしろくてね」

遠田さんは、高校卒業後、今の会社に就職し、それからずっと、  
仕事一筋だったらしい。でも、その入院のときのちよつとした出来  
事が、彼の人生を大きく変えていったようだ。

「誰に教わったわけじゃない、本当に、自己流だよ。だから、ここ  
に一緒に飾ってあるほかの人の絵みたい、上手には描けないんだ。

技術がないからね。でも、思いの丈をぶつけるように、カンバスに向かうとね、とても気持ちが悪く落ち着く。そうやって、好きなことをやっているうちに、だんだん、自分の描きたいものが描けるようになってきたんだ……」

言葉の一つ一つが、心に響く。

カンバスに塗られた油絵の具の色は、私の知っているどの絵よりも重く、そして、暖かい。存在感を作り出す陰の暗い色、そして木肌を撫でる、明るい光。様々な色が、折り重なり、そこに、本物の木があるような、臨場感。思わず、息を呑む。

身体全体を使って描かれている。その筆の運び一つをとっても、力強く、滑らかだ。

彼の二枚の絵には、人柄とその生き方が、はっきりと浮き出ているのだ。

私はふと、自分が油絵を描いていたときのことを思い出した。

なかなか、思うように色が出せなかった。特に、影の色。

「一番明るい色の隣に、一番暗い色があるのだ」と、美術の先生は言った。

しかし、私は、その、「一番暗い色」を塗るのが怖かった。どうしても、思うように暗い色を出せずに、どの絵もピンボケしてしまつた。せつかくの絵も、色の濃淡が出せないのでは、見ていてつまらない。わかっていながらも、高校生の私には、それが出来なかった。

遠田さんの絵を見て、私は、自分が何故あの時、暗い色が出せなかったのか、漸く答えが出た気がした。私には、確実に足りないものがあつたのだ。

経験。

絵を習ったことがない、と言う遠田さんに出せて、私に出せなかった、影の色。それは、人間として成長して、初めて出せる色では

ないのか。幾ら私が、あの時頑張っても駄目だったのは、私に暗い色を出せるだけの経験が、足りなかったのではないのか。

遠田さんは他のお客さんに呼ばれ、私の隣からそっと、いなくなつた。

しかし私は、そこから暫く動くことが出来なかった。食い入るように、彼の紡ぎ出す色を見つめていた。

あれから、十年近く経つ。

久しぶりに、しまっていた油絵の道具を出してみた。

ツンと来る油とシンナーの臭いが、懐かしい。

カンバスと、足りない絵の具を新調し、筆を取る。

遠田さんが絵を描き始めたという、三十歳になった私は、高校の頃より、成長しているのだろうか。あの頃出せなかった、暗い、影の色を、今は迷わず塗ることが出来るだろうか。

怖い、と言う思いは、まだある。

それでも、描いてみよう。

私がもし、あの頃より大人になっていれば、きっと、出来るはずなのだから。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2236c/>

---

絵画展にて

2009年3月24日09時40分発行